

## 言語的コミュニケーションのとれない患者への関わり

～思いを汲み取ることから学んだこと～

池本恵美 圓井和恵 矢島玲子\*

国立病院機構鳥取医療センター看護部 5 病棟

### Care for patients unable to communicate verbally

— Learning by comprehending thoughts —

Megumi Ikemoto, Kazue Marui, Reiko Yajima\*

The 5th Ward, Department of Nursing, NHO Tottori Medical Center

\*Correspondence: 鳥取市三津 876 番地 5 病棟

#### 要旨

重症心身障害児（者）は、言語による意思表示が困難な患者が多い。種痘脳炎後遺症の 60 代女性の C 氏は言語障害、アテトーゼ型四肢麻痺、パーキンソン症候群を有し、発語ができないために、自分の右肩に指で文字を書くことで、思いを表現していた。しかし、思いがうまく伝わらず、イライラすることが増えていた。そのため、C 氏の訴えを理解して思いを汲み取り、それによりコミュニケーションができることで、C 氏は喜び、楽しみや気分転換へと繋がって、笑顔で過ごせることができる様になって欲しいと考えた。

そこで、以前行っていたトーキングエイド（Talking Aid Light）を再開し、一定した方法で関わることにより、C 氏はリラックスして、トーキングエイドを使用してコミュニケーションができるようになった。さらに、C 氏が自分の右肩に指で文字を書くことでも、コミュニケーションがうまく行くようになった。患者と向き合い、寄り添った支援を行うことで、患者の能力を十分に引き出せることが明らかとなった。また、快表情も増え、信頼関係が築けた。鳥取臨床科学 10(3), 124-127, 2018

#### Abstract

Many patients with severe motor and intellectual disabilities have difficulty with expressing their intentions verbally. Patient C aged in her 60s has experienced sequelae of smallpox vaccine-induced encephalitis and with disturbance of speech, athetoid quadriplegia, and parkinsonism. She is unable to speak. She therefore expresses her thoughts by writing letters with her finger on her right shoulder. However, she was unable to convey her thoughts well and would get irritated frequently. So we tried to communicate with her by understanding her complaint and comprehend her thoughts so that she can feel joy and happiness and change her mood to live happily with a smile on her face. To this end, we recommenced to use the Talking Aid (Talking Aid Light, Namco) that she had conducted previously. By providing care through a consistent method, patient C became able to relax and communicate using the Talking Aid (Talking Aid Light). Furthermore, patient C became able

to communicate well even by writing letters with her finger on her right shoulder. We therefore believe that the patient's competency can be fully drawn out by facing the patient and providing closer support. The patient showed comfortable expression, and we could build a relationship of trust. *Tottori J. Clin. Res.* 10(3), 124-127, 2018

**Key words:** 重症心身障害児(者), 種痘脳炎, コミュニケーション支援, トーキングエイド; children and persons with severe motor and intellectual disabilities, smallpox vaccine-induced encephalitis, communication support, Talking Aid

## はじめに

5病棟のAチームの患者は、医療処置が中心で、全員が日常生活に介助を要する。AチームのC氏は、日々、ベッド上で生活し、録画したテレビを繰り返し観賞して、一日を過ごしている。余暇活動は、週に一度、車椅子に乗り、デイルームで過ごすことと、指導室の個別療育活動に週に一度、参加するのみである。デイルームに出ることに対し、右手を振り、出たくないというサインを出すことがあり、活動に対する興味や期待が減少している。また、思いが伝わらず、怒った表情で両手を握り、イライラすることが増えている。C氏がイライラする原因は何かと考え、C氏の訴えを理解することで思いを汲み取り、その結果、C氏が笑顔で過ごして欲しいと取り組んだ関わりを報告する。

## I. 目的

言語的な意思表示が困難なため、思いが伝わらず、イライラすることが増えているC氏に対し、コミュニケーション法を工夫することにより訴えを理解することで、思いを汲み取り、それにより、C氏が思いを表出することができ、笑顔で過ごせるようになる。

## II. 事例紹介

C氏, 60歳代, 女性.

診断は種痘脳炎後遺症で、言語障害、アテトーゼ型四肢麻痺、パーキンソン症候群を呈している。

基本的日常生活は全介助である。発達年齢は、手の運動は1歳9ヶ月、発語発達は5ヶ月～6ヶ月、基本的生活習慣は1歳2ヶ月～1歳4ヶ月、対人関係発達は4歳8ヶ月、言語理解は4歳8ヶ月である。

コミュニケーションは、トーキングエイド (Talking Aid Light, Namco) を使用することによる。発語はないが、会話は自分の右肩に指で文字を書き行う。数種のボディランゲージあり。日常会話は、ほぼ理解できる。

言語IQは52、大島分類は15である。

## III. 方法

1. 実施期間: 平成29年9月11日～10月15日に、2～5の全てを行った。
2. 表情チェックシート(図1)で、C氏の表情の変化を把握した。
3. 毎週火、木曜日の午前のおむつ交換後、ベッドサイドで30分間、コミュニケーションを図った。
3. トーキングエイド、文字盤を使い、又は指で右肩に文字を書き、C氏の思いを汲み取ることを努力した。
4. 話の内容は、本人用ノートに書き留めた。
5. C氏の訴えに応じ、チームに相談し、解決策をみつけた。

## IV. 倫理的配慮

倫理委員会で承諾を得た後、対象者、及び代諾者に、研究の目的と方法、及び、個人情報・データ内容は研究以外では使用しな